

「育てる会 五十年のあゆみ」発刊に寄せて

元育てる会評議員 中川 聰七郎

育てる会との出会い

私は、昭和五十（一九七五）年の春、農林省（現在の農林水産省）大臣官房企画室の政策作出部門で仕事をしていた頃、育てる会を知りました。当時は食糧政策の過渡期で、コメ余りの時代になりつつあり、農政についても食糧政策というよりは地域政策としての作出が求められていました。そうした時に青木孝安氏（現会長）が大臣官房にお見えになったのです。

疎開体験のこと

私は、昭和十（一九三五）年八月に京都市内で生まれました。そして、国民学校三年生の時、戦争激化とともに疎開を求められ、弟と共に母の実家（三重県桑名市郊外の農家）に預けられました。

当時は既に電力に事欠き、夜は暗くなると寢床に入りましたし、物資も不足していて草鞋ぞうりを自ら作って履くという日々でした。暫くして、勤労奉仕作業も加わりましたが、とにかく飯だけは食べ放題で不自由はありませんでした。いよいよ戦争が激しくなると、桑名のベアリング工場が米軍の空爆目標とされたため京都の自宅に戻され、四年生になった年の春、今度は集団疎開の対象となり、丹後の大江山山麓おおえやまに行くことになりました。

疎開中は、寺で集団生活をし、食料の配給も滞りがちでお腹が空いており、おかゆのお弁当も登校途中で食べてしまう……という日々でした。連日、潮岬しおのみさき沖からやってくる米軍艦載機が上空を飛び、舞鶴への空爆も続きました。そうした中、小学校の講堂には海兵隊の青年たちが宿泊し、日々、激しい訓練をしていました。食料不足はとても深刻でしたが、地元の子供たちのお弁当にはご飯がぎっしり詰まっていましたし、海兵隊の食事にも山盛りの白米が供されていました。一方で、私たち疎開生はとても飢えており、栄養不足からか全身がデキモノだらけとなっていましたし、食料がなくなると同時に燃料も不足し、大江山山麓にみんなで薪を取りに行ったりもしました。

敗戦から京都へ

敗戦の知らせは、村長宅の庭に置かれたラジオで聞きましたが、雑音だらけで聞き取れず、後

で寮母さんから「負けた」と聞きました。その日の夜は寮母さんたちが大泣きをし、「女はアメリカ、男はアフリカ」などと話していたのを記憶しています。敗戦後は、舞鶴からの引き上げ列車が頻繁に通うようになり、そのため私たちは後回しとなって、結局、京都に戻ったのは十一月末でした。山陰線で二条駅に降り立った時は晩秋の寒々とした日でした。母が三歳の妹をおんぶして迎えてくれ、市内をアメリカ兵がジープで走り回っていました。京都でも食料配給はとも少なく、母は郊外の農村を回っては、芋や芋ヅルを手に入れて帰りました。暫くしてその母が病気で倒れました。栄養不足と過労が重なり肺結核となってしまうたのです。京大病院に入院し、私も母の看病のため献身しましたが、残念ながら五年生の夏に死去しました。母の死後には次の母（継母）がやって来しました。

後日、私も結核感染が発覚して休学となり、復学したのは六年生の時でした。幸い私の結核は新薬投与のお陰で一年半掛かって治りましたが、高三の時には再発して再度療養を余儀なくされ、結局、同年配の者とは三年遅れの人生となってしまいました。

体験から得たもの

私は疎開という形で田舎に身を置き、自然に接することの多い田舎での生活を体験しました。このことは、田舎生活が都会生活と異なるものであることを知り、実際に体験したものでした。

そして、在るものを大事に無駄なく使う、そして使えるという姿勢を学びました。また、母親の死を知った時、時間が自分と関係なく過ぎ去る……という非情な現実を実感したのでした。

山村留学という言葉の持つ意味

結局、私の人生を書き記すことで表現しなかったことは、「山村留学」という言葉に含まれる意味です。それはすなわち、過去から積み重ねられた歴史と自然や暮らしの中から、自分の生きる道を見出すことができるとともに、暮らしの中には人々の交流があり、自分だけでは決して生きていくことができないということを知ること。山村留学とは、こうしたことに気づかせてくれる大事なキーワードであることを言いたかったのです。

なかかわ・そうしちろう……………

京都大学卒業後、農林省（現農林水産省）入省。食料政策、農業・農村政策等の立案に参画。国土庁農村整備課長を経て、農水省大臣官房参事官、経済企画庁審議官。（財）21世紀村づくり塾専務理事就任後は、「農村・むらづくり」の視点から全国の組織化にも尽力。国立愛媛大学農学部教授を退任後、公立鳥取環境大学の創立に参画、同大学教授を六年勤め退職。平成五年より育てる会理事、平成二十六年より同評議員となり平成三十年退任。